

(特別支援教育)

一人一人の児童のニーズに応じた交流教育のあり方を求めて

—居住地校交流の取り組みについて—

大阪市立西淀川特別支援学校 中島知子・大園綾菜・中野友貴

1. はじめに

本校では、小学部と中学部の児童・生徒が居住する地域の学校と連携し、交流の取り組みを行っている。

今回の発表では、本校の居住地校交流の取り組みについて事例を交えて報告する。

2. 学校の概要

【西淀川特別支援学校について】

本校は肢体不自由の児童・生徒が通学する特別支援学校である。小学部には、26名が在籍する。

「みんな・なかよく・あかるく・つよく」の校訓を掲げ、小学部・中学部・高等部の連携を図りながら教育活動に取り組んでいる。

【小学部について】

全員に重複障がいがある。15名が医療的ケアを必要としており、14名にてんかん発作があるため、日頃から児童の健康状態をしっかりと把握する必要がある。

コミュニケーションは、一人一人の児童に応じた方法を工夫することが必要である。

給食は、咀嚼機能に応じた段階食（5段階）を実施し、きめ細かく対応している。

3. 交流の概要

【居住地校交流について】

児童が居住する地域の学校と連携し、交流の取り組みを行っている。

保護者の願いのもと居住地校教員と相談のうえ、計画・実施している。

【居住地校交流実施にあたって】

本校のねらい：地域とつながりを維持し、共に学び・共に生きる意識・関係を育成する。

児童の目的：教育課程に位置づけ、個々の状況に応じて定める。

実施内容：担当者と相談しながら、目的を達成できるように内容を決定する。

4. 実践報告

【Aさんの4年間の居住地校交流について】

3年生より6年生（現在）

H24年度5回 H25年度9回 H26年度7回 H27年度9回(予定)

授業交流 国語、理科、外国語、音楽、体育、道徳

その他の交流 卒業生を祝う会、運動会、修学旅行の報告会、作品展出展

Aさん新聞 特別支援学校での生活を紹介

交流ノート 交流内容の記録、児童のサイン

B校児童による交流記録用紙の活用

卒業に向けて「巣立ちゆく子どもたちにとって『地域』の一員である意識は大切なものである。その観点でもAさんとの交流を意識させたい」という思いを共通理解し、運動会では、B校の児童が今までの経験を生かして参加内容を話し合って決定し、全員が達成感を感じるような交流ができた。

今後の予定 保護者によるAさんの生い立ちの話（道徳）、卒業生を祝う会参加

【Bさんの居住地校交流について】

5年生6年生

H25年度5回 H26年度5回

交流内容 C小まつり 授業（音楽、英語、支援学級のゲーム、体育）
卒業式練習

【Cさんの居住地校交流について】

1年生3学期より2年生（現在）

H26年度4回 H27年度5回（予定）

交流内容 自己紹介 授業（音楽、生活、算数、国語） ふれあい昔遊び大会
もちつきまつり D校フェスティバル 作品展見学

【平成26年度の居住地校交流取り組みの報告】

①実施状況

②本校交流実施教員による感想

良かった点 反省・課題などの意見

H26年度 居住地校交流 評価結果報告

小学部本校評価 小学部相手校評価

5. 交流のまとめと今後の課題

【居住地校交流 2年間のまとめ（平成26年度研究紀要より）】

H24年度、H25年度の実施状況及び評価のまとめとH26年度の報告をまとめ居住地校交流取り組みの評価とし、H27年度の実施に向けた改善の資料とした。

交流の実施内容は、行事参加から授業へ参加することが増えつつある。窓口教員の提案のおかげで、交流の受け入れは円滑な場合が多く交流は提案を受けて進むことも多い。今後、本校が児童の実態を踏まえた交流について提案し、相手校との協議が目標を踏まえた内容の検討まで踏み込んでいるか、検討する段階にきていると考える。

【今後の取り組みについて】

行事や授業等、交流を通して共に活動することで、交流対象の児童に対する居住地校の児童・教員の理解が得られ充実した交流につながっている。さまざまな交流に参加することで本校の児童の様子を知ってもらえる機会が増え、居住地校の児童とのつながりも広がっていくと思われる。

今後も居住地校と本校との行事日程の調整を行い、本校児童の体力、体調に配慮しながら交流を続けていき、同じ地域に住む児童と共に活動し、相互理解を深めていきたいと考える。